

令和5年度 福生市立学校 学校経営方針

学校名 福生市立福生第四小学校

校長名 南方 孝之

公印

教育目標

- ◎進んで学ぶ子
- 思いやりのある子
- 体を鍛えて頑張る子

1 目指す特色ある学校像

「元気いっぱい 笑顔あふれる みんなの学校」を合言葉に、確かな学力の定着と健やかな心と体の育成を目指す。

- ◇ 自ら積極的に学び、高め合う授業を通して、確かな学力を身に付ける学校
- ◇ 人とのかかわり合いを大切にして、思いやりのある子どもを育てる学校
- ◇ 家庭と連携して望ましい生活習慣を確立し、健やかな体をつくる学校
- ◇ 本物に出会うことで学ぶ意欲を高め、探究力と豊かな人間性を育てる学校
- ◇ 地域と連携を図り、地域から学び、地域に誇りをもつ子どもを育てる学校

2 学校経営の目標

(1) 中期的目標

- ア ICTを効果的に活用した授業改善と個別最適化された学びの実現及び家庭学習の充実により、児童の基礎学力の定着と思考力・判断力・表現力の向上を図る。
- イ 幼保小連携により、基本的な生活習慣を確立するとともに、小中一貫の視点から、自分自身とかかわる全ての人を大切にする意識を高め、社会性の向上を図る。
- ウ 家庭と連携して「早寝・早起き・朝ご飯」の確実な定着を図るとともに、多様な運動に親しむことを通して、体力の向上を図る。
- エ コミュニティ・スクールとして、地域と連携した教育活動を積極的に推進し、児童の豊かな学びの実現を目指す。
- オ 家庭との円滑なコミュニケーションを含めた、校務のデジタル化とペーパーレス化を推進する。
- カ 主幹教諭が要となり、主任教諭を活用した校内研修の充実を通して、全ての教員の授業力や学級経営力の向上を図る。

(2) 本年度の目標

- ア 知を伸ばす。
 - ① ICT等を活用した学習の充実
 - ② 学習習慣（学びの日常化）の定着
- イ 豊かな心を育む。
 - ① 道徳教育と人権教育の充実
 - ② 規範意識や自己有用感の向上
- ウ 心身を鍛える。
 - ① 継続して行える運動の充実（運動の日常化）
 - ② 最後までやり抜く強い心の育成
- エ 教職員の専門性の向上を図る。
 - ① 校内相互授業参観の日常化
 - ② 研究会参加や研修受講による専門性の向上

3 目標達成に向けての課題

- (1) 学習習慣及び運動習慣が二極化しており、家庭との連携が重要である。
- (2) いろいろな友達や様々な大人とかかわり、寛容な心を育成する必要がある。
- (3) コミュニティ・スクールとしての活動を、持続可能な形として継続していく。

4 経営の具体策

- (1) 子どもの知を伸ばす。
 - ア 学習習慣の定着に課題を抱える低学年児童のために、平日の放課後に補習教室を開設する。「ふっさっ子の広場」と連携し、1学期から週に3回程度の実施を目指す。
 - イ 年間を通して、朝学習と朝読書を継続して行う。単学級では、担任と副担任による複数指導体制を導入する。
 - ウ サマースクール（夏季補習）では、高校生ボランティアによる指導の充実を図る。
 - エ 家庭学習では基礎的な事柄の習熟とともに、自主学習ノート等、子ども自身が選択した課題にも低学年の段階から取り組ませ、自主的な学習態度の育成を図る。
 - オ タブレット端末を活用して「ドリルパーク」を積極的に取り組ませ、学習理解の習熟を図るとともに、学習習慣の定着を目指す。
- (2) 豊かな心を育む。
 - ア 2学級ある学年は、新年度から毎年クラス替えを行う。固定しがちな人間関係をリセットすることにより、新たな人間関係を構築させる。
 - イ 単学級の学年には、副担任制度を導入する。また、担任も毎年変わることを原則とする。様々な大人とかかわることにより、協調性やコミュニケーション能力の育成につなげる。
 - ウ 「ハッピータイム（縦割り班活動）」や体力テスト・諸行事等では、異学年交流を活発に取り入れ、相手を思いやる優しい心を培う機会とする。
- (3) 心身を鍛える。
 - ア ゲストティーチャーとして専門家やアスリート等を招聘し、運動能力の向上を図る。
 - イ 運動週間として全校で取り組む持久走・縄跳びを1学級1取組に位置付け、カード等を活用しながら年間通して取り組み、体力の向上につなげる。
 - ウ 運動の日常化のため、ゲームを取り入れたもの（アルティメット等）に取り組む。
- (4) 教職員の専門性の向上を図る。
 - ア 都の研修や研究会で得られた成果は、OJTや資料配布等で校内の教員に還元する。

5 年度末のチェックポイント

- (1) 全国学力学習状況調査で、全体の平均数値が2ポイント以上増加しているか。
- (2) 毎日の家庭学習の習慣が、100%達成できているか。
- (3) ICTの活用として、ドリルパークの使用率が常に60%を超えているか。
- (4) 不登校の児童について、電話や対面等、一日に一回は担任が接触しているか。
- (5) 保護者やコミュニティ・スクール委員による学校評価で、「児童は楽しく学校生活を送っている」という項目の肯定的評価が、90%以上になっているか。